

芳賀繁先生の定年ご退職にあたって

大石 幸二

「大学人」として私が敬愛する芳賀繁先生が、本年度末をもって定年ご退職を迎えられる。また一人、文学部心理学科時代から立教心理を支え、その発展に尽力してこられた先生が学科を離れていられる。ほんとうに寂しい限りである。学科所属教員は皆、一様にそう感じているに違いない。それほど芳賀先生の存在は“偉大”であった。

芳賀先生は京都大学、同大学院を修了された後、旧国鉄・鉄道労働科学研究所、J R・鉄道総合技術研究所に勤められた。この間にトロント大学大学院への留学も経験された。その後、東和大学工学部に転じ、立教大学文学部を経て現代心理学部にて教鞭をとられ、今日に至っておられる。立教大学での奉職期間は通算で20年間に及ぶ。芳賀先生の専攻領域は、認知心理学、交通心理学、産業心理学、人間工学にまで広がり、各領域で多くの業績をおさめられている。それぞれの専門学会で多数要職も務められ、広く心理学界に貢献された。また顕著な社会活動として、東日本大震災で甚大な被害に見舞われた石巻市立大川小学校の事故検証委員会に委員として加われ、その検証と提言に係る『事故検証報告書』の作成に積極的な役割を果たされたことは、私たちの記憶にも新しい。

私が芳賀先生に惹かれるのは、理路整然とした発言の裏にいつも教育者としての“思い”が見え隠れしているところである。古き良き時代の「大学人」には必ずといって良いほどそのような“思い”が底流していた。人一倍の研究を行い、研究業績を蓄積された。外部資金や競争的資金を積極的に獲得され、数多くの研究プロジェクトを牽引された。芳賀先生の口癖のひとつに「教員の役割は、研究費を外部から獲得して、大学院生の研究

環境を整えることだ」というものがある。少なくともこの言葉に私は大きな刺激を受け励みにしてきた。芳賀先生は指導学生を適切に導かれ、学科所属教員の誰よりも学位を取得させた。教育にも大学運営にも熱心であり、私たちによき手本を示された。このような姿勢は、私たちがかつて師事し薫陶を受けたあの頃の「大学人」の在り方に似ている。だから、芳賀先生と話していると、どことなく懐かしい感情が去来するのだと思う。

学科長や専攻主任、執行部会座長などを歴任され、学部運営に積極的な役割を果たされた。学部の国際化や大学院生の研究環境の整備に力を尽くされた点は特筆に値する。だから、誰一人として芳賀先生にお世話になったところさえ、悪く言う人はいないのである。加えて、芳賀先生の人間的魅力を高めている要素として、時々“うっかりミス”をおかしてくれるということがある、と私は心密かに感じている。つまり、“完璧ではない”のである。これが芳賀先生の愛すべきキャラクターを形作っている。学科所属教員は皆、学科会や教授会の席で提案説明メモを散逸してしまい、慌ててそれを「搜索」する姿を一度ならず「目撃」している。その一方で、芳賀先生の個人研究室には季節ごとにハロウィーンのカボチャやら、クリスマスのリースやらが飾られ、心地よいクラシックの調べが流れるというほかの学科所属教員には見られない繊細な一面も見せてくれていた。これには、学生のみならず私たち教職員も心を癒やされていた。これも学生たちが芳賀先生を慕っているヒミツのひとつである……と私は思う。

私が暮らす田舎の図書館に立ち寄った時、目にしたヒューマンエラーに関する書籍に写る芳賀先生は、眼鏡を掛けておらず髭をたくわえて、真っ

直ぐ前を向く若手研究者の顔をしていた。この写真を拝見して私は、優しい目をした壮年期の芳賀先生に出会えて良かったと心からそう感じた。きっと芳賀先生は、これからもヒューマンエラー研究に邁進することと思う。ますますお元気で価値ある研究成果を社会還元していただきたい。